<u>りびんぐらいぶず</u> 令和3(2021)年6月第2号

救いの御名のほとけさま(下)

ご讃題

汝一心正念にして直ちに来たれ、 我よく汝を護らん

(Ref '散善義」七祖註釈版 p467)

はじめに

阿弥陀様は、苦悩する私を救わんが為に、お手許で衆生がお浄土に生まれていく(今生では 摂取不捨の利益に包まれる)阿弥陀様の行をお手建て下さってお与え下さり(本願力回向)、

「さあ、称えてご覧」とお勧め下さったのです(Ref 発願廻向釈)。

そのようにご案内戴いたのですから 「**さようか」(「さようか」とは信心を顕す**)とお念仏 致しましょう。大行は回向されたのですから頂戴できなくてはなりません。

大行がもたらすもの

なる程、お勧めの儘に称えれば、直ちに私の上に如来様の行(大行)が働き出され、南無阿弥陀仏のお喚び声が聞こえて下さいます。

大行釈には主語がありませんから、如来様と衆生が共に主語となりえます。如来様のお心に おまかせして称えたのですから、聞こえて下さったものこそは、私の声であって私の声でない。 如来様そのお方のお喚び声だったと頂戴できるではありませんか。

聞名とは何を聞くのか

お勧めに遇うて称えれば、直ちに南無阿弥陀仏と聞こえて下さいます。

そのとき聞こえて下さった南無阿弥陀仏こそが、「汝一心正念にして直ちに来たれ、我よく 汝を護らん」との阿弥陀如来のお喚び声だったのです(本願招喚の勅命)。

第十七願から頂戴し直しましょう

信心正因 称名報恩には、信心獲得に到る道行きが示されていません。これは、直接親鸞聖人のみ教えをお伝えしようとなさった覚如上人の構想であり、親鸞聖人が法然聖人のみ教えをお説き下さろうとなさったご苦労が失念されています。

法然聖人は、第十八願を念仏往生の願とご覧遊ばしたのであり、親鸞聖人ご在世のときは もとより、お亡くなりになってからも百年位迄は、そのみ教えが生きていました(令和三年五月十四日滋賀教区布教団総会黒田義道京女教授のご講義)から、覚如上人が「信心正因 称名報恩」と仰ったとしても内包された問題は明るみには出ませんでした。 けれども、昭和二十一年に「信心正因 称名報恩」が教義として宗制が定められた戦後は、時代的に念仏往生の前提がなくなっていますから、問題となるのです。

今は第十七願を諸仏称名の願と受けとめ、称えれば直ちに聞こえて下さる南無阿弥陀佛を 讃仰し、「聞即信」と目ざめて行く道行きをしっかりお伝えできなくてはなりません。

原因系では、まず、称名正業(正定業)

できなければ、当院を訪ねた青年の問いに答えたことにはなりません。

称名も原因系のエネルギッシュな御言葉を選び直すことができなくてはなりません。

してみれば、『信心正因 称名正業』が最もオーソドックスだったのはありませんか。

親鸞聖人は、行巻で「**称名はすなはちこれ最勝真妙の正業なり**」とおっしゃっていたからです(Ref「称名破満釈」註釈版聖典 p146)。

称名は、衆生に許される行で捉え直しますと、はじめに「称名讃仰」となるでしょうね。

諸仏如来(信心の人)(Ref '親鸞聖人御消息』第二十条))ならばこそ、お名号の素晴らしさが分りますからこれを讃嘆なさいます。

讃嘆は、諸仏の行だから衆生には赦されないと云うことはありません。

お聞かせに与った衆生は「何と尊いことよのう、まことよのう、まことまこと」と讃仰させて 戴くことができるからです。

実践的にお聴聞の場を共にすれば衆生は、信心の人、他力の念仏者に導かれます。

曇鸞大師のお徳をお称え下さったご和讃に

阿弥陀仏の御名(みな)を聞き

歓喜讃仰せしむれば

功徳の宝を具足して

一念大利無上なり、と導かれるのです。

(Ref '讚阿弥陀仏偈和讚』第三十首註釈版聖典 p561)

称名(讃仰)は、聞名

されば、「称名は、 護仰に他ならず、 衆生には自ら称えた 護仰が如来様のお喚び声となって 迫って下さることになります。

私達は、すぐには信心獲得できません。

けれども、お喚び声なら、聞いて聞いて聞き抜く三昧の裡に、終にその時がやってきて如来 様のお喚び声に喚び覚まされるのです。

瓜生津隆眞先生は、近江の妙好人木下マサさんの語録を一つ一つ繙いて、マサさんには、 聞いて聞いて聞き抜いてゆかれた厳しいお聴聞があったとおっしゃいました。

この御言葉が大きなヒントになったのです。

讃仰は聞名三昧であり、信楽に恵まれる

親鸞聖人は、「聞即信」と仰せ下さったのです(Ref 『一念多念文意』註釈版 p678)。

何ゆゑ**「聞即信」**と仰せ下さったか。成就文に別の御言葉として現れる「聞」と「信」とを何ゆゑ一体のものとして採り上げる必要があったのか。

困難な課題ですが、不肖は、木下マサさん、お軽さんの実践、一蓮院秀存師の煩悶歌から次の様に頂戴するようになったのです。

お念仏する「讃仰」は、「聞名三昧」であり、三昧の裡に終にそのときがやってきて如来様に 喚び覚まされる(信楽)からでした。

「信」は見えませんから容易でありませんが、「聞」なら聞こえて下さいますから他力の念仏者に**随念**して聞名させて戴けます。第十八願の「**乃至十念」は、随念だった**からです。

お喚び声の主は、阿弥陀如来、衆生はそれをお聞かせに与り、三昧の裡に終に喚び覚まされる(信楽)からです。

唯一度であろうとも丁寧に合掌礼拝し、どんなご利益がありますかと問うた青年の素朴な姿に相応しい答えが見つかって欲しい。

お答えを探し求めて三ヶ月が過ぎ去った頃、とうとう「**ふと仰ぎ見るお姿は**」という讃歌になって現れ出て下さったのです。

まったく「ふと」のありさまそのままに

ー、ふと仰ぎみるおすがたは すくいの御名(みな)のほとけさま されば六字と名告(なの)らして となえてご覧と勧めます

二、ふと仰ぎみるおすがたは すくいの御名(みな)のほとけさま されば私に称えさせ 耳に聞こえて喚(ょ)び給う

三、ふと仰ぎみるおすがたは すくいの御名(みな)のほとけさま さればかさねてきかしめて われをたのめとよびさます

なもあみだんぶ

では、皆様ご一緒に**随念**致しましょう。合掌。

稲枝西組 圓廣寺「親鸞聖人讃仰特別布教 令和三年七月四日(日)十四時~ コンテンツには、「正覚寺 北小松」でヒットする「FC2」からお入り戴けます。

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内)〒520-0501 大津市北小松四五二番地

077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥